

推薦レポート

渡部麻実先生推薦

芥川龍之介『煙草と悪魔』考―差異と加筆が生み出す解釈―

廣 畝 杏

一 はじめに

芥川龍之介『煙草と悪魔』（初出「煙草」『新思潮』一九一六年一月）を対象とした研究は現在、様々な方向性を有し展開している。その中でも、『煙草と悪魔』の典拠との比較を論じる先行研究に着目し、本稿では、『煙草と悪魔』の典拠との差異の比較から見出せる新たな発見が可能であるかを試みる。加えて、テキスト生成過程における異同にみられる効果についても考察し、その二点を踏まえてテキストの読みを更新することを目的とする。

二 典拠『比較神話学』との差異

『煙草と悪魔』の典拠については、既に広瀬朝光が、

しかし今や芥川がこの材料として用いたのは、国百科全書第百十六編「比較神話学」（高木敏雄著、明治三十七年十月、東京博文館発行）所載、第五章英雄神話の第三節怪物退治説話であるといえる。¹⁾

と述べており、後発の研究もそれに倣う形となっている。本稿でも同様
に高木敏雄『比較神話学』（博文館、一九〇四年一〇月）を用いて比較

を行う。

『比較神話学』と『煙草と悪魔』の差異について、以下の三点に着目する。一点目は（悪魔の姿の違い）、二点目は（農夫から牛商人への変更）、さらに三点目として、（物語中の解決策の違い）について考えていくこととする。

一点目の差異について、『比較神話学』の煙草の起源にまつわる内容では、悪魔の姿は特に秘匿されることもなく、「昔農夫あり。悪魔の畑を作るを見て問て曰く、汝は何を栽培するや」という作中の文章から、農夫にとつて悪魔が存在していることは当然であり、悪魔の存在が周知のものであることが読み取れる。一方で『煙草と悪魔』の悪魔はありのままの姿ではなく、伊留満に姿を変えているのである。その際、悪魔の化ける能力について作中では「勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外套を着た立派な騎士に化ける位な先生のことだから、こんな芸当などは、何でもない」といったように、ゲーテの『ファウスト』を持ち出して悪魔像を補強している。ゲーテの『ファウスト』に登場する悪魔を連想することについて、郡司英子は、

芥川はドクトル・ファウストを尋ねる時にこのような騎士（赤い

外套を着た立派な騎士」…引用者注)に化ける、あの悪魔のことだから、フランシス上に伴っている伊留満の一人に化けるのは、極めてやさしいことだと言っている。しかも、この悪魔は南蛮から渡り来した西洋の悪魔なのである。このことから、芥川は西洋の悪魔を代表するものとして「ファウスト」に登場するメフィストフェレスを連想したのではないかということが考えられる⁽³⁾。

とし、芥川が想起した悪魔像を『ファウスト』に求め、悪魔が変化することについての発想元として提示している。これを踏まえたうえで本稿ではさらに、なぜ伊留満に化けたのかを考察してみる。

伊留満という語について、大槻文彦編『言海』(一八八九年)には(ハバテレン(伴天連)の項目に「昔シ、切支丹宗ノ宣教師ノ称号。其次ナルヲ、伊留満(兄弟ノ義)トイフ。」とある。また、金澤庄三郎編『辞林』(三省堂、一九〇七年)では(ハバテレン)の項目として「昔時、伝道のため我国に渡来したる切支丹宗の宣教師の号。」と説明されている。『煙草と悪魔』内における時代背景からすると、「切支丹の信者も出来ないで、肝腎の誘惑する相手が、一人もゐないと云ふ事である」という記述からも分かるように、キリスト教自体が浸透していないため、そもそも悪魔という存在も認知されておらず、悪魔のままで日本人と対峙するに至ることは叶わない。舞台が『比較神話学』のようにヨーロッパのキリスト教国であれば悪魔は悪魔のままで人間に認知されることが可能であるが、日本では宗教観の障壁に阻まれてしまい不可能であったのだ。それ故に『煙草と悪魔』の悪魔は典拠と異なり、『ファウスト』に出てくる悪魔のような化ける能力を発揮する必要があった。そして偽装したのはキリスト教を布教する伊留満、つまり自身が姿を現した時に悪魔という存在を認知可能である人間を増やす存在であった。

さらに、悪魔が伊留満に化けることで、牛商人は悪魔を伊留満と信じ「手前も、近ごろはフランシス様の御教化をうけて、この通り御宗旨に、帰依して居りますのですから」と自ら進んで帰依したことを悪魔に開示している。キリスト教が浸透していない場所において、帰依した牛商人は帰依していない人間に比べ、悪魔という存在を認識出来る人間であるといえる。つまり、悪魔が行った伊留満への変装は、誘惑対象として勝算のある自身の存在認知性の高い人間をおびき寄せる餌としても機能していると考えることが出来るのではないだろうか。悪魔の変装必要性は宗教観の壁を越えた先で、勝算のある誘惑実行のためにも求められていたのである。

加えて、『ファウスト』の作中で悪魔が犬に姿を変えている場面がある。ワグネルとファウストが刈株や苗の間を走っている黒犬を見るシーンにおいて、「尨犬らしい気まぐれな奴でございませう」「どうも霊の痕がなく、総てが躰に過ぎないようだ」と述べたのち、ファウストは家に尨犬を連れ帰ってしまう。そして、「あの尨犬は幅も広がり丈も伸びる」「己はなんと云う化物を内へ連れて来たのだろう」と、犬の外見に騙されて悪魔を連れこんでしまったことを悔いている。これらの『ファウスト』の悪魔像を借りるとするならば、伊留満に化けるという設定には、得体のしれないものよりも、(犬)や(伊留満(人間))といった親しみやすいものに姿を変えたほうが人間に近づきやすい、というような思惑めいた側面もあるのではないだろうか。また、『煙草と悪魔』では伊留満に化けた悪魔の成り行きについて、「その後も、やはり伊留満のなりをして、方々をさまよって、歩いたものらしい」とし、出没の噂を記述した部分から、布教活動で広く各地に赴くという名目で各地に広がるキリスト教徒を効率よく的確に狙い、悪魔としての活動を円滑にできるといった都

合の良さが観取できる。

続いて〈農夫から牛商人への変更〉という点について考えていく。『比較神話学』で悪魔と対峙した人間は〈農夫〉であったが、『煙草と悪魔』では〈牛商人〉と変更されている。なぜ牛商人なのだろうか。この疑問点にも宗教観が関わってくるのではないかと考える。牛は、日本では仏教が伝来したことに伴う殺生禁断によって殺生を免れた存在であり、農耕に有用な家畜であったことから長らく大切にされてきた。牛は仏教の庇護下に置かれた存在として位置づけられる。それだけでなく、日本における牛は天神の使いであったり、牛仏の話に見られる変身譚であったりと神聖視される存在でもある。そのように考えると、キリスト教の関連物である悪魔と仏の化身という一面を有する牛、という構図を見出せはしないか。以上を踏まえるなら、「悪魔は、早速、鋤鋤を借りて来て、路ばたの畠を、根気よく、耕しはじめた」という作中描写は、悪魔が日本の大地を耕し、煙草という墮落への引き金となる植物を育成したと読み替えることができる。つまり、それはキリスト教という異国の宗教に開拓され悪が根付いていく様子の比喩として機能しているのではないか。そんな畑を終盤、牛は「ふみ荒らした」。これは一見、仏教の異教徒の侵略への対抗であるように思われる。しかし牛は、牛商人から綱を手放され、畑へ追い込まれた結果悪魔の耕した地をふみ荒らすことになった。つまり、日本人としての牛商人が、牛という仏教の比喩である存在を手放すことで仏教との別離が起き、西洋の宗教に伴う価値観が輸入されたことで、日本の大地が荒らされたと読むこともできるのだ。さらに言えば、荒れた畑を耕す〈農夫〉の姿はどこにもなく、いまや仏教の土壌を離れて改宗した〈牛商人〉しかない。〈農夫〉と比べ〈牛商人〉は再び畑を耕し、荒れた畑を元に戻す力、仏教に立ち返る力を十分には

持たない存在である。そこには仏教を自ら手放し、西洋に感化された末の姿が示唆されているのではないだろうか。上記を踏まえると、〈農夫〉から〈牛商人〉へと変更されたことに意味を見出すことが可能であると考える。

さらに、「あめうしに腹突かれる」ということわざがあるが、熊代彦太郎編『俚諺辞典』（金港堂書籍、一九〇六年）では、「黄牛に衝かる、」という項目で「油断して失敗するをいふ。黄牛は温順なるものなれば、よもやと油断して、ついつかる、となり。」と説明されている。『煙草と悪魔』において悪魔は「人を莫迦にしたやうな、慇懃な調子」で牛商人に接し、そして油断して見下していたが、見事にやり込められてしまう。こうした悪魔の様子はこのことわざに一致しているように思われる。牛商人の連れていた牛が「一頭の黄牛」だったのはこのためであったと述べてもよいのではないだろうか。

また、三点目の〈物語中の解決策の違い〉について、前述した牛と牛商人の持つ意味と背景にある宗教観の視点を通して考えてみる事が出来る。『比較神話学』での解決は「鳥の姿に装ひ、かの畑に行き、菜の葉を食はんとす」という、悪魔から煙草の名を引き出すために、人間が鳥に変身して煙草の葉を食べようとする突飛な方法で為せる業であった他方、『煙草と悪魔』では、牛商人が牛を放ち、煙草畑を荒らすことで悪魔に煙草の名を口にさせた。人間が鳥に変身する非現実的な手法ではなく、牛を放つという現実的な手法での解決を図ったことは、『煙草と悪魔』の現実的世界構築の表現であると捉えることが出来る。

三 加筆された「柵」の効果

これまで典拠との比較から作品を考察してきた。以下では、『煙草と

悪魔』の生成過程に見られる異同についても注目したい。

初収単行本「紅毛は、畑の柵によりかかりながら、頭をふった。さうして、なれない日本語で云った」(二二頁四行目)とある点について、初出では「紅毛は、頭をふった。」と記述されている。また、畑の柵についても、初収単行本「紫の花のむらがった畑の柵の中で」(二二頁一二行目)は、初出だけが「紫の花のむらがった畠の中で」となっており、後半部で牛が畑を荒らす場面でも、初収単行本「跳ね上がりながら、柵を破って、畑をふみ荒らした」(二六頁七行目)は、「跳ね上がりながら、畠をふみ荒らした」と、初出のみ柵がない設定であることが分かる。柵の加筆によりどのような変化が生じたのか、考察していく。

柵が設置されることについては、単純に畑を守る道具として用いていると捉えてよいと思われる。ただ、この畑は悪魔のちに牛商人と対峙するきっかけとなった煙草が手塩にかけて育成されている畑である。その畑に柵がわざわざ追加されたということに留意してみると、この柵は道具としての柵だけでなく、悪魔にとつての煙草の価値を具現するものとしても捉え得るのではないだろうか。誘惑のきっかけとなった煙草は、悪魔にとつて墮落へいざなう足掛かりとなるものであり、「何時でも、その畑へ来て、余念なく培養につとめてゐた」ほどである。そして、悪魔は牛商人との会話を「畑の柵によりかかりながら」行った。そこにはもちろん「人を莫迦にしたやうな」様子も含まれているが、柵を守る煙草畑への信頼、つまり、「人を墮落させる」という目的を達成するのに十分な手段、よりどころを手に入れていすることで生じた自信も、含まれているのではないだろうか。だからこそ、悪魔は柵に身を預けられるのである。

そうしてみると、悪魔がよりかかっていた柵が、牛によって破壊され

るといふ描写には、悪魔の作戦の失敗と共に、自信の崩壊も見てとれるだろう。加筆された柵は、悪魔の自信の表れとその自信が打ち砕かれる様という内容を添える効果をもたらしていると考ええる。

四 おわりに

これまで典拠との差異を先行研究も参考に比較し、悪魔が伊留満に化けた理由と、農夫から牛商人への変更に見出せる意味の発見、そしてテクスト生成過程で生じた「柵」の加筆に見られる効果を考察してきた。結果として、背景に見られる宗教観の障壁によって典拠と異なる悪魔と牛商人の存在が生み出されていることや、加筆によって悪魔の自信の表出と、その自信が崩壊する様子を描いていることを導き出した。これらの考察を踏まえると、「煙草と悪魔」という作品には、悪魔と人間の勝負譚の形式の中に、西洋との接触と宗教観の衝突を描いている物語であると考えることが出来るのではないだろうか。このようなテクストの読みを、本稿の結論として提示したい。

注

- (1) 広瀬朝光「芥川の切支丹物新考察―「煙草」と「るしへる」の典拠―」(『芸研究』一九七五年五月)
- (2) 広瀬朝光は典拠の根拠として、芥川龍之介「校正の后に」(『新思潮』第一巻、第九号、一九一六年十一月)を挙げている。それに倣い本稿作成にあたり参照した。
- (3) 郡司英子「『煙草と悪魔』試論」(『論究』一九八三年三月)
- (4) 引用は『隅外全集』第一二巻(岩波書店、一九七二年)によった。
- (5) 『煙草と悪魔』の初収単行本は『煙草と悪魔』(新潮社、一九一七年一月)。また芥川の生前、『報恩記』(而立社、一九二四年一〇月)に再録されている。

付記

テキストには岩波書店版『芥川龍之介全集』第二卷（一九九五年、一二月）を用い、旧字を新字に改めるとともにルビは適宜省略した。